

発達障害児の主体的な活動参加の支援（1）

—自発的な言語化と自己選択を促進する条件の検討—

○竹森亜美

中内麻美

大石幸二

（立教大学心理芸術人文学研究所）

（立教大学心理芸術人文学研究所）

（立教大学現代心理学部）

KEY WORDS: 発達障害 言語化 自立支援

目的

自ら語ること（言語化）は、行動の調整に積極的な役割を果たすことが知られている（Jones, 2003; Wessberg, 1990）。そして、行動を円滑に遂行するために、これらの語りは内在化（内言として作用）される必要がある。

そこで本研究では、発達障害児・者の自発的な言語化および自己選択を促すための条件を検討した。自立支援の観点から、公共交通機関を利用した移動支援を課題場面とし、支援対象児と協働して視覚的支援ツールを作成した。その過程で生じた支援対象児の行動を捉え、発達障害児の主体性を重視した自立支援のあり方について検討を行った。

方法

支援対象児 支援の対象とされたのは、公立中学校知的障害特別支援学級に在籍する2年生女子1名であった。生活年齢10歳1ヶ月のときに実施した新版S・M社会生活能力検査の結果、社会生活年齢は8歳0ヶ月であった。保護者への聞き取りから、将来の進学や自立にむけて、1人で公共交通機関を利用できるようになることが支援ニーズの1つとしてあげられていた。

期間と場面設定 201x年10月から201x+1年3月までに、合計5回の移動支援を実施した。本研究実施前には、保護者に研究の目的と内容について説明し、研究結果報告の同意を得た上で行った（立教大学心理学研究倫理委員会承認番号：16-1）。実施する課題については、支援対象児にも説明を行った。移動支援は、支援対象児の自宅最寄駅からY大学構内まで電車・バスを利用して移動する道程とし、安全面に配慮してスタッフが援助できる体制を整えた。

手続き 以下の2つの実践を順に行った。

実践1 支援対象児と協働した支援ツールの作成

- ①支援対象児にスタッフ4名が随行し、実際の移動ルートを通り、手がかりとなる駅の表示案内やバス停の確認を行った。支援対象児には、支援ツール作成に必要な掲示板などの写真撮影を一部依頼した。
- ②作成した支援ツールの見本を参照しながら、スタッフが積極的選択肢（支援度高）・消極的選択肢（支援度低）を提示し、支援対象児への利便性・選好の聴取を行った。

Table 1 支援ツール作成のための選択肢

	積極的選択肢	消極的選択肢
大きさ	見本大(はがきサイズ)	見本小(ICカードサイズ)
内容	見本より情報を追加	見本と同じ情報量
厚さ	ラミネート加工あり	ラミネート加工なし
デザイン	好みに合わせたデザイン	見本通りのデザイン
形式	リング形式	裏表1枚

実践2 公共交通機関を使用した移動支援

作成した支援ツールを活用しながら、支援対象児が独力で自宅最寄駅からY大学構内までバスと電車を用いて移動できるかどうか検証を行った。支援対象児との待ち合わせ場所は、1試行目はY大学最寄駅改札口、2試行目はY大学最寄駅構内、3試行目はY大学最寄駅外バス停のように段階的に変更した。

結果

実践1 支援対象児と協働した支援ツールの作成

支援対象児への利便性・選好の聴き取りの結果、研究当初想定されていた「積極的選択」「消極的選択」「リジェクト」に加え、「自発的な提案」が見られた。

Table 2 支援ツール作成時の選択と提案

	大きさ	内容	厚さ	デザイン	形式
積極的選択			○	○	
消極的選択	○	○			○
リジェクト					
自発的な提案	○			○	

支援ツールの大きさの「自発的な提案」は、支援対象児自身が実際に支援ツールを持ち運ぶことを想定し、「カバンのチャック（に入れられる大きさ）」という具体的なイメージが言語化された。また、支援ツール完成前に、支援対象児が自発的にスタッフに電話をかけ、「駅のカード（＝支援ツール）ください」と要望を伝えることがあった。

実践2 公共交通機関を使用した移動支援

支援ツールを活用し、支援対象児が独力で移動できたか否かを、自発行動の生起の有無により検討した。

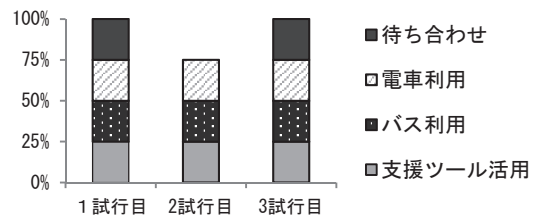


Figure 1 電車・バス利用による移動支援結果

スタッフとの待ち合わせ、電車・バス利用という移動手段の活用は、待ち合わせ場所が段階的に変更されても、十分に遂行できていた。その際、支援対象児は、支援ツールを駅の改札やホーム上で自発的に確認していた。ただし、場所変更の伝達に失敗した2試行目は「待ち合わせ」は非生起となった。

考察

支援対象児と協働した支援ツールの作成【実践1】では、積極的選択と消極的選択の両基準が参照され、支援対象児の主体性に基づく自己選択が達成された。また、研究当初は想定されなかった自発的な提案もなされた。このことから、他者と視覚的情報をもとにした相談機会の設定が、発達障害児の自発的な言語化と自己選択を促進し得ることが示唆された。公共交通機関を使用した移動支援【実践2】では、支援対象児の課題に対する意欲や動機づけが高く維持された。このことから、発達障害児に、自発的な言語化と自己選択の機会を設定することで、彼らの主体性を重視した自立支援を行うことができるものと考えられた。

付記

本研究は、博報財団第12回研究助成により、予備研究として実施された。ここに記して謝意を表する。(TAKEMORI Ami, NAKAUCHI Asami, OISHI Kouji)